

<題目> 「小学校低学年における楽譜教育の再検討」

<目次>

序論

1. 研究の動機とねらい
2. 研究の構成

本論

1. 楽譜の本質と意義
 - 1.1 楽譜の本質
 - 1.2 楽譜の意義
2. 小学校低学年における楽譜教育の現状と問題点
 - 2.1 雑誌記事、論文から
 - 2.2 教育芸術社現行教科書から
 - 2.3 東京書籍現行教科書から
 - 2.4 まとめ
3. ピアノメソードの楽譜教育
 - 3.1 ペースメソード
 - 3.2 ヤマハ、カワイのピアノメソード
 - 3.3 まとめ
4. コダーイのメソード楽譜教育
 - 4.1 コダーイの音楽教育
 - 4.2 コダーイの音楽教育における楽譜
5. 楽譜教育法の比較
 - 5.1 楽譜教育の現状とピアノメソードの楽譜教育の比較
 - 5.2 楽譜教育の現状とコダーイの楽譜教育の比較
 - 5.3 ピアノメソードの楽譜教育とコダーイの楽譜教育の比較

結論

まとめと考察

参考文献・参考資料

謝辞

<研究の要約>

本研究では、学校音楽教育現場における楽譜教育を見直して問題点を明らかにし、楽譜教育の方法を様々なメソードを調査し改善点を見出すことを目的とした。楽譜

教育を行なう時期としては、楽譜に苦手感を抱く前が良いと考えられるため、研究内容は小学校低学年に設定し、また子どもに一番身近であることから、本研究における「楽譜」はいわゆる五線譜に限定するものとした。

まず本論の1において、楽譜の存在する意義についての考察を行なった。楽譜は古代ギリシアから存在しており、常に音楽とともにあったことや、また、楽譜のない国では音楽をする人間が限られることから、楽譜が存在することにより音楽を多くの人が楽しむことができるのだと考えられる。そして楽譜は、決してそれ自身が音楽を奏でるものではないが、楽譜を見ることによりイメージの中で音が響くようになれば、それは音楽的にも価値のあることである。

本論2では、現在の音楽教育がどのような状態であるのかを、雑誌、論文、現行教科書を調べることにより明らかにしていった。その結果、現場の指導者にとっての楽譜教育の重要度は低いと言わざるを得ず、教科書の分析からも、楽譜教育を重視する視点はあまり見られなかった。特に、2002年度新学習指導要領で調が削減された点は、楽譜教育を行なうことが益々困難となった改訂だったのではないかと考えられる。

次に、現在の学校音楽教育の楽譜指導の改善策を考えるために、本論の3では、ピアノメソッドを調査し、4ではコダーイの音楽教育と楽譜教育について調査した。ピアノメソッドの中の一つであるペースメソッドには、楽譜教育のためには、バランスの良い音楽教育を行なうべきであるとした特徴が見られた。楽譜教育とは楽譜の理論を教えるだけではなく、音感やリズム感、フレーズ感など、様々な音楽能力とともに高めていくものである。また、コダーイは音楽教育における楽譜を重視しており、音楽を楽しむための努力の一つとして楽譜の読み書きを挙げていた。楽譜を学ぶ時には「生きた音楽」を体感した後で、知識を得るという楽譜教育法が明らかになった。

最後に本論の5では、改善策を考察する足がかりとして、2章から4章に述べた楽譜教育の方法について、それぞれを比較した。

結論として、本論3,4の楽譜教育法を参考に、現在の学校音楽教育現場における楽譜教育の改善策を考察した。学習指導要領における調の限定の問題が1点目である。学校音楽教育の指針となるべき学習指導要領でそのように載っているという点は、現場での楽譜の軽視につながると考えられる。2点目は、全ての調を偏りなく学ぶことが良いということである。1点目と重なることでもあるが、現状としては、全ての調を学習しているところは、あまり見られない。しかし、楽譜教育だけでなく音楽的にも、全ての調に触れて感性を育てることは重要である。3点目にあげるのは、移動ド唱法と固定ド唱法についての改善案である。固定ドの方が理解が簡単であるという意見も見られるが、移動ド唱法ならば楽譜を読む際に、より音楽的な読み方ができると考えられる。そして移動ド唱法を教える際には、楽譜嫌いな子どもを作らないように、ハンガリーの音楽教育を参考にし、ハンドサインを取り入れることを提案する。

以上のようなことを本研究では考察していった。現実として、重要視されることのない楽譜教育であるが、楽譜を軽視しつづけることは、子どもの豊かな音楽活動の可能性の芽を潰すことになってしまうのではないか。楽譜教育をより良く指導していくことは、音楽教育において重要なことであり、今後一層充実していくべきであると考えられる。